

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

カール・クラウス(\*)の訴えは陶酔<sup>ア</sup>と熱狂の声にかき消された。戦火が広がり、十余年にわたって続いた第二次世界大戦の悪夢が終わってから、現在ではさらに七十年以上が経過している。いまや、インターネット技術を背景にしたソーシャル・メディアが発達し、個々人が世界中の不特定多数の人々に向けて自分の主張を発信することができるようになった。それと反比例して、大新聞やテレビなどのマス・メディアはその影響力を弱めつつあると言われることもある。仮にその見立<sup>A</sup>てが正しいとすれば、じきよくと深く切り結んだクラウスの警告はもはや過去のものとなったかに見える。「我々はもう、マス・メディアが自分の思っていたことを代弁していると見なすことはないし、マス・メディアの言葉をただ繰り返すようなことでもない」、そう言われるかもしれない。

現在のマス・メディアが、クラウスが直接対峙<sup>たいじ</sup>していたものと同様の影響力をもっていないという見方は、多分に疑わしい。だが、たとえ仮にその見方を受け入れたとしても、状況はむしろさらに悪くなりつつあると言えるのではないか。自分の主張として他者の言葉をそのまま反復することは、**B** ソーシャル・メディア・サービスの恩恵を受ける現在の方が遙かに簡単である。実際、いま急速に拡大しているのは、他者の言葉に対する何の留保もない相乗りと反復に過ぎないのではないか。秒単位のタイムスタンプが押された言説がリアルタイムで無数に流れる状況にあつては、言葉を発する方も受ける方も、自他の言葉に耳を澄ますどころか、時間に追い立てられ、タイミングよく言葉を流す即応性に支配されているのではないか。「リツイート」や「シェア」等の反射的な引用・拡散や、「いいね」等の間髪<sup>か</sup>入れない肯定的反応のいせき<sup>ウ</sup>もたらずのは、それによって単に重量を増した言葉が他の言葉を押しつけるという力学であり、かつてない速度と規模をもつデマや煽動<sup>せんどう</sup>の生産システムではないのか。あるいは、そうした引用・拡散や肯定的反応を誘うような言葉を発するという、絶え間ない常套句<sup>じょうたうく</sup>の生産システムではないのか。賞賛も非難も、議論や煽り<sup>あお</sup>合いも、結局のところ常套句(あるいは、それよりさらに寿命が短く適用範囲の狭い流行語)の使用へと硬直化し、その反復やおうしゅう<sup>エ</sup>の勢いと熱量が、物事の真偽<sup>マオ</sup>や価値の代用品となってしまうのではないか。そうして、我々が向かおうとしているのは、重量と勢いと熱量のある声

への——その声を代表する誰かへの——「迷い」なき同調と一体化の空間なのではないか。つまり、我々は結局、誰かに対して、マス・メディアを介することすらなく、じかに身を任せるようになりつつあるだけではないか。否、むしろ我々は、誰かですらないような、空気や雰囲気や流れといったあいまいな何かに、じかに融け込みつつあるだけではないのか。

これらの問いすべてにイエスと答えることは、あまりにシニカルで悲観的に過ぎるだろう。情報技術の革命的な進歩と、それを個々人に開放するプラットフォームの整備と、それと共に立ち現れてきた社会の新たな様相に対して、不信を振り撒いているだけなのかもしれない。しかし、これらの問いを杞憂(きゆう)と言いつつ切ることでもできないはずである。誰しも自分の話す言葉に耳を傾け、自分の言葉について思いを凝らし始めなければならぬ、というクラウスの呼びかけは、他のどの時代よりも、**F**いま現在の我々に突きつけられていると言えるだろう。

では、我々がこの呼びかけに応えらるとすれば、具体的に何をすべきなのだろうか。他者の言葉を全く反復せず、常套句を一切使用しないようにすべきなのだろうか。

言うまでもなく、そのようなことは不可能だ。クラウスも、詩人が生み出すような新奇な言葉を日々常に繰り出すことを勧めているわけではない。彼は、「慣用表現の活性化」ないし「決まり文句の鮮度を高めること」を促している。これは大きく分けて二つの事柄を指していると思われる。順に見ていこう。

(1) まずひとつは、使い古された言葉が湛(た)える奥行き——様々な言葉やイメージや思考を喚起する可能性——に對して改めて意識的になる、ということである。たとえば、「やばい」という言葉は、現在の日本において多くの場合、常套句として濫用されている言葉だと言えるだろう。しかし、常にそうであるわけではない。確かに、いま若い世代の人々は、たとえば食事をしているとき、「かなり旨い」や「すごく美味しい」、「絶妙な風味だ」、「大変オツだ」などとも表現できる場面でしばしば「やばい」と言う。「これやばい!」といった具合である。しかし、こうした用法は必ずしも、多様な言葉を押し潰して平板化させ、実際にはやばくない(危険や不都合が予測されない)現実を歪めている、とは限らない。むしろ、「危険や不都合が予測される」という原義を響かせつつ、「恐ろしいほど旨い」、「取り乱しそうなほど旨い」、「旨すぎて、はまってしまいそう」といった微妙なニュアンスを帯びたかたちで、「やばい」が用いられている場合もある。

肝心なのは、この言葉を用いる者自身がそうしたニュアンスに自覚的になれるかどうかである。たとえば、何気なく「これやばい!」と言ったとしても、仮に他人から「いま『やばい』ってどういう意味で言ったの?」と聞かれたとして、いま挙げたようなニュアンスを説明できるのであれば、そのときに用いた「やばい」は常套句ではない。あるいは、そのように明確に言葉にできなくても、「かなり旨い」や「すごく美味しい」ではどうもしっくりこない、ここでは「やばい」がびつたりだ、という風に感じられるのなら、その場合の「やばい」は常套句とは一線を画している。つまり、そうした場合の「やばい」は、「危険だ」「不都合だ」「恐ろしい」「取り乱しそう」「はまってしまいそう」といった多面性をもった言葉として——他の言葉には置き換えきれない独特の表情をもつ生き生きとした言葉、鮮度の高い言葉として——活性化しうるのである。

このことは逆に言えば、本来多面性をもちうる言葉であっても、ただそれだけで生命を得られるわけではない、ということでもある。たとえば、前章で取り上げた「むつごい」(\*カ)などの言葉も、実際には常套句と化しているケースが間々見られるだろう。すなわち、他の様々な言葉と類似しつつも異なる独特の言葉としてこうした方言が用いられているわけではない、単に手っ取り早く言葉を発するために用いられたり、あるいは、当該の方言が通じる共同体への同調や一体化の手段として用いられたりしているケースも多いだろう。ある言葉を立体的な(言葉のかたち)とするのは、その言葉が互いに類似した多様な意味合いで用いられてきたという事実それ自体ではない。人々がそのことを忘れ去らず、そうした多様な用法も踏まえて、その言葉を現にどう用い、どう理解するかなのである。

(2) また、決まり文句の鮮度を高めるといえるのは、言葉が用いられてきた型通りの仕方を踏まえ、その型を破る、ということも含意しているだろう。すなわち、すっかり常套句と化したような無表情な言葉であっても、それをこれまでとは異なる文脈のなかに置いたり、別の様々な言葉と組み合わせたりすることによって、再び生き生きとした表情を宿らせることができる、ということである。

たとえば、「最近の若者は……」とか「若者の〇〇離れ」といった言い回しがたいていの場合平板な常套句であるのは、人々が現にそのように使っているからである。具体的には、当該の問題が若い世代だけではなく明らかに全世代に当てはま

るものであるのに(低いマナー、公共空間での暴力、等々)、「最近の若者はマナーが悪い」などと言ったり、あるいは、当該の事物の意味や社会的な位置づけなどが時代と共にかなり変化しているにもかかわらず(車の所有、飲み会、等々)、「若者の深刻な車離れ」などと言う、といった具合である。それは、「若者」と括られる人々が実際にはどれほど多様な生活を送っているかに連想や想像を広げることなく、手っ取り早く一纏めにして思考停止し、その単純化されたまがい物の「現実」を嘆いたり批判したりしているに過ぎない。

言葉をあいまいに空虚に振り回し、現実を歪めるような、こうした常套句の使用に対して、たとえば絶妙な切り返しがないでいるのが、「若者の深刻な犯罪離れ」という言葉である。この言葉は、現実を歪めるのではなく、逆に、現実を突きつけることによって、「若者の〇〇離れ」という常套句を逆手にとり、むしろこの言葉を活性化させている。たとえば、この言葉から我々は、実際には若年層の凶悪犯罪は以前よりも減少していることや、にもかかわらず、「近頃は若者の凶悪犯罪が増加している」という印象論が蔓延<sup>はびこ</sup>っていることなどをそうきできるだろう。また、それをきっかけに、若年層に対する見方や世代論のあり方などについて再考していくことができるだろう。

こうした「型破り」な言葉の使用に顕れているのは、知らずと固定化されている一面的な見方をずらすということ、いまの見方を相対化し、別の見方を重ねてみせるということである。それは陶酔ではなく諧謔<sup>M</sup>(かいぎやく)と批判<sup>クリティック</sup>の精神であり、ユーモアやウィット、エスプリ、機転、皮肉、諷刺<sup>ふうし</sup>、等々と呼ばれる精神である。

ピエール・ブルデューの言葉を借りるなら、クラウス自身が長年実践してみせたことも、当時の政治家やジャーナリスト、作家などの発言を切り貼りし、組み直し、新たな連関の下に置くことによって、「文章と資料の地位を完全に変化させる」ことであつた。「この作業によって、ぞんざい<sup>N</sup>に目を通されるだけのものが、突然、驚くべき、さらにはスキャンダルな外見を呈することになる」。それはまさしく、そのままでは流れていく言葉に注意を向けさせ、その言葉に対する見方の転換<sup>O</sup>—アスペクトの変化—をもたらすことであり、ぞんざいに目を通されるだけの言葉の鮮度を高める営みにほかならなかつた。

型を破るためには、まず型を身につけなければならない。生ける最大の文化<sup>ソ</sup>いさんとしての言語を継承し、複雑<sup>タ</sup>に絡み合

う語彙に馴染み、自分のものにする<sup>な</sup>こと、そのために無数の語彙とともに長く生活を送り、無数の言語的実践に参与することが、まずもつて不可欠である。そのうえで、個々の言葉の表情や響きの違いをあらためて吟味し、様々な連想を喚起する力のある生きた言葉をたぐり寄せる必要がある。クラウスの勧める「言葉の実習」とは、こうした営みの全体を指していると言えるだろう。

(古田徹也「言葉の魂の哲学」より)

(\*) カール・クラウス(1874-1936) …ボヘミア出身のユダヤ人評論家。痛烈な諷刺<sup>ふうし</sup>で時代を批評し、ヒトラーの台頭直前に言葉の退廃現象が戦争につながる<sup>つな</sup>ると警告を発した。

(\*\*) むつごい…香川県で使われる方言。「油っぼい」「くどい」などの意味を持つ。

問一 「見立て」<sup>A</sup>の言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

- 1 立証
- 2 立場
- 3 自立
- 4 見聞
- 5 見識
- 6 所見

問二 とには共通する語句が入る。それを次の中から一つ選べ。

- 1 あえて
- 2 すでに
- 3 まさに
- 4 よもや
- 5 さいわい
- 6 まったく

問三 「間髪入れない」<sup>C</sup>の言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

- 1 正確な
- 2 明瞭な
- 3 即時的な
- 4 協力的な
- 5 排他的な
- 6 当之无愧な

問四 「杞憂(きゆう)」<sup>D</sup>の反対を意味する語句として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

- 1 太平 2 平穩 3 安穩 4 喜樂 5 樂觀 6 歡喜

問五

「凝らし始めなければならぬ」とあるが、「凝らす」の意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。5

- 1 反映する 2 考慮する 3 巡察する 4 産出する 5 結合する 6 集中する

問六

「新奇」とあるが、「奇」を用いた語句で**適当でないもの**を次の中から一つ選べ。6

- 1 奇人 2 奇少 3 奇怪 4 奇抜 5 奇勝 6 奇観

問七

「湛(ただ)える」の言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。7

- 1 包含する 2 示唆する 3 共有する 4 充当する 5 表現する 6 案出する

問八

「濫用」の意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。8

- 1 単純に使うこと 2 流暢に使うこと 3 簡単に使うこと  
4 むやみに使うこと 5 多義的に使うこと 6 あやまって使うこと

問九

「何気なく」の意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。9

- 1 いかんなく 2 さりげなく 3 つつがなく 4 ゆくりなく 5 よどみなく 6 わるぎなく

問十

「間々」の意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。10

- 1 いつも 2 たびたび 3 ときおり 4 ふたたび 5 わずかに 6 またしても

問十一 「逆手にとり」<sup>L</sup>とあるが、「逆手にとる」の意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 11

- 1 反論する
- 2 阻害する
- 3 利用する
- 4 封印する
- 5 排除する
- 6 超越する

問十二 「諧諷（かいぎやく）」<sup>M</sup>の意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 12

- 1 いたみ
- 2 いやみ
- 3 おかしみ
- 4 ただしさ
- 5 いさぎよさ
- 6 うつくしさ

問十三 「ぞんざい」<sup>N</sup>の反対を意味する語句として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 13

- 1 入念
- 2 正確
- 3 勇敢
- 4 真剣
- 5 虚心
- 6 詳細

問十四 「転換」<sup>O</sup>とあるが、「転」を用いた語句として**適当でないもの**を次の中から一つ選べ。 14

- 1 栄転
- 2 動転
- 3 暗転
- 4 転気
- 5 転義
- 6 転嫁

問十五 本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。 15 ( 15 ) の欄に、二カ所マークすること

- 1 「やばい」という言葉は、多様な意味で用いられていたが、今は常套句と化している。
- 2 「やばい」という言葉は、多くの若者に用いられることで常套句とは一線を画すことになった。
- 3 「やばい」という言葉は、多様な意味合いで実際に用いられることで、生命を得るようになった。
- 4 「若者の深刻な犯罪離れ」という言葉は、常套句の固定化された見方を相対化している。
- 5 「若者の深刻な犯罪離れ」という言葉は、多様な言葉を平板化させ現実に目を向けさせている。
- 6 「若者の深刻な犯罪離れ」という言葉は、まがいものの現実を嘆くことで言葉を活性化している。

問十六 「陶酔」<sup>A</sup>・「真偽」<sup>O</sup>・「任せる」<sup>カ</sup>・「喚起」<sup>ケ</sup>・「当該」<sup>シ</sup>・「絡み」<sup>タ</sup>の読みをひらがなでしるせ。

問十七 「じきよく」・「るいせき」・「おうしゆう」・「あいまい」・「そうき」・「いさん」を漢字でしるせ。

問十八 「慣用表現の活性化」ないし「決まり文句の鮮度を高めること」とあるが、それを別の言い方で示している部分を文中よりそのまま抜き出してしるせ(七字)。

問十九 「微妙なニュアンス」とあるが、それを別の言い方で示している部分を文中よりそのまま抜き出してしるせ(十九字)。

問二十 「肝心なのは、この言葉を用いる者自身がそうしたニュアンスに自覚的になれるかどうかである」とあるが、なぜ「ニュアンスに自覚的に」なることが「肝心」なのか、文中の語句を用いて説明せよ(六十字以内)。

問二十一 「型破り」な言葉の使用」とあるが、それはどのような努力によって可能となると筆者は考えているか。文中の語句を用いて説明せよ(六十字以内)。



国 語

解答例

問	解答
問一	⑥
問二	③
問三	③
問四	⑤
問五	⑥
問六	②
問七	①
問八	④
問九	②
問十	③
問十一	③
問十二	③
問十三	①
問十四	④
問十五	③
	④

順不同

問	解答
問十六	ア とうすい
	オ しんぎ
	カ まかせる
	ケ かんき
	シ とうがい
	タ からみ
問十七	イ 時局
	ウ 累積
	エ 応酬
	キ 曖昧
	ス 想起
	ソ 遺産
問十八	〈言葉の実習〉
問十九	他の言葉には置き換えきれない独特の表情
問二十	ニュアンスを説明できるならば、その言語は常套句とは一線を画した、多面性をもった鮮度の高い言葉として活性化しうるため。
問二十一	文化としての言語を継承し、無数の言語的实践に参加したうえで、個々の言葉のニュアンスの違いをあらためて吟味すること。